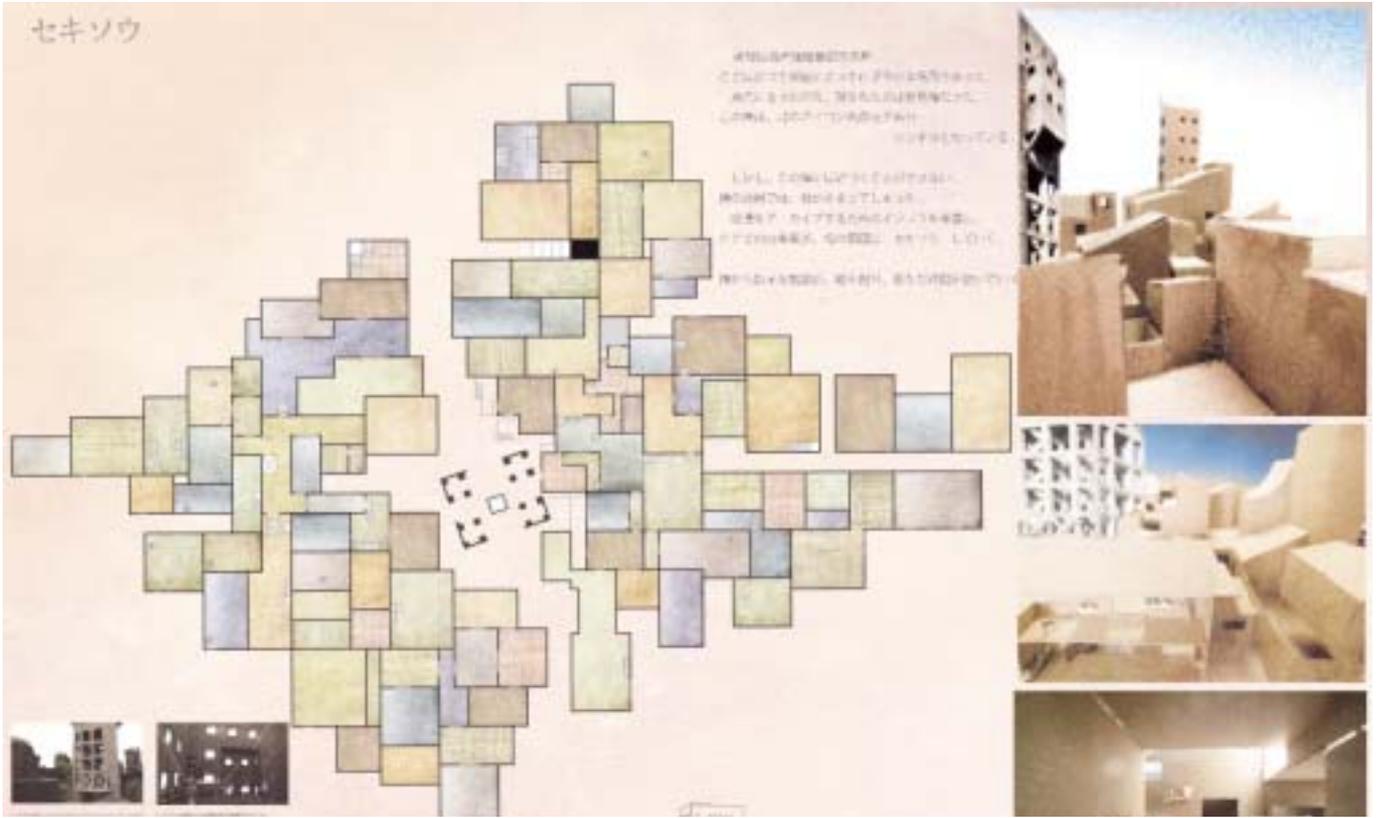




セキソウ

諸富 太輔 (もろとみ だいすけ)
東京理科大学 理工学部 建築学科

特別審査員賞



過去の記憶を内包する、志免炭坑竪坑櫓。
しかし、櫓と人々の距離は時間を経るほどに遠くなってしまふ。
この時間の流れが途絶えてしまった場所を、新たに時間を紡ぐ場所として再構築したい。
本は時間の媒体であると考え、過去と現在をつなぐ一つのツールとしてプログラムに用いる。
既存の図書館の機能を拡張し、様々な機能や場所を周囲に付加していく。
そのようなプロセスで、居場所性を持つ まち を櫓周囲に、櫓が核となるように計画する。
ここでは本が、本や人の気分と場所とが呼応したと所に置かれていく。
このことが連続して行われることによって、蓄積された本が人々の記憶をアーカイブする。
その本で満たされた空間は、人々の時間を紡ぎ、新たな時間の集積として存在し続けていく。



講評

昭和史を彩る遺構、福岡市志免(シメ)鉄道記念館にある石炭採掘の施設、竪坑櫓(タテコヤグラ)。この威風堂々としたモニュメントに往事の繁栄と賑わいを取り戻す事を意図した作品だと思われる。その為に彼が描いたアイデアは、「アーカイブ」廃棄された図書が集まり自由に閲覧出来る場所としてこの遺構を再生し、その事に連鎖する様に自由に建物が積み重なって行く。その事に依り街が創造されていく事である。着眼点が素晴らしいこのモニュメントに対する愛情が感じ入る作品である。
ただ、テーマの重要な部分「炭鉱の産業遺跡」と「アーカイブ(書庫・記録保管所)」との繋がりからどの様にこの作品の形態が導き出されたかについての説明を聞きたかった。恐らく、あとワンシーンの「思い」を挿入出来たならば、テーマ性がより一層強くなり、楽しい作品として仕上がった事と感じられる。地方都市の再生手法としても評価されるべき、とても興味深い作品である。(審査委員：山下 勲)